

広告

企画・制作 LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

# 木の力を凝縮した、存在感ある「木塊」

岡部 創太 高知／木工家具職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」(主催:LEXUS)は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

## レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりに挑戦

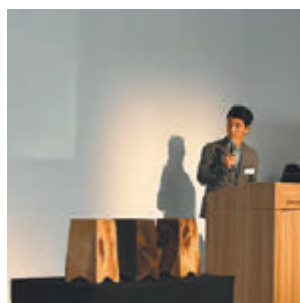
本プロジェクトは2016年、プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、生駒芳子氏(ファッション・ジャーナリスト)・アート・プロデューサー(下川一哉氏)と匠研究所)らをサポートメンバーに発足。以来、全国の若き匠の挑戦が刻まれたプロダクトは、ふるさと納税の返礼品への指定やロックフェラー家主催のチャリティーイベントへの出品、上海での国際的な展示会への出品など、目覚ましい活躍を見せている。

3年目となった今回は、全国47都道府県から計50名の若き匠が選出。昨半夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを経て、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトの制作に取り組んだ。

1月24日、東京ミッドタウン日比谷で行われた発表会では、国内外の百貨店・セレクトショップバイヤー・メディア・デザイナー関係者などに向けて自身のプロダクトをプレゼンテーション。世界へ羽ばたく足が



1月24日、プレゼンテーションにて



プレゼンテーションの様子

また当日は、19年の新たな取り組みとして、全国の匠と、世界的クリエイター(コラボレーター)が、新たなプロダクトを制作するコラボレーションプログラムを発表。コラボレーターである隈研吾氏(建築家)、廣川玉枝氏(SOMARIA クリエイティブディレクター)、森永邦彦氏(ANREALAGE)代表取締役社長・デザイナー、辰野しずか氏(クリエイティブディレクター)プロダクトデザイナー)が登場し、想いを語った。19年秋頃には完成したコラボ作品、過去のプロジェクトから生まれた匠たちの作品を披露するイベントを京都の地で開催することを合わせて発表。プロジェクトも一歩一歩進化している。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。



小山氏が選ぶ「注目の匠」に

「地域の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。」

LEXUSが掲げる「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。高知県選出の匠、木工家具職人の岡部創太さんのモノづくりへかける思いと完成した作品を紹介する。

### 風倒木に感じた命の漲り

岡部さんは、高知市内で「COMMON MFG.」を営む木工家具職人。岡部さんが作るシンプルで端正なデザインの家具には、静謐でありながら力強さと確かさがある。素材にとことん向き合い、その特性や表情を生かした家具は人の暮らしに心地よくなじむ。

今回、県産材を使ったプロダクトを制作するに当たり、岡部さんが考えたのは「高知県発の物語」。考案の過程で、木の活用が推進される森林率日本一の本県で、自然災害による倒木や道路工事で伐採された木が破砕処理され、燃料用チップとなる運命にあることを知った。樹種も大きさもさまざまな生木が山のように積まれた貯木場を訪れた際、「木のエネルギーに圧倒された」という。チェーンソー一本で格闘し、切り出した丸太から表現した



岡部さんの作業風景

### あるがまま、自然に近い造形物

エリア・コンサルティングでは、サポートメンバーの川又俊明氏から、「形はソリッドに、木の表情をしっかりと表現した方がいい」とアドバイスを受け、「迷いがなくなった」と、方向性を定めて最終調整に入った。テーブルやスタンドなど家具に寄せたプロダクトにする案もあったが、「木塊」のコンセプトに立ち戻り、「用途にとられない、オブジェのようなもの」を完成させた。

「木として存在した場所」を示す高知市の緯度経度「E133.293」を刻印したこのプロダクトの名前は、「木



完成プロダクト「木塊オブジェクト kinagori」

いと思ったのは「木塊」の存在感だった。「家具製作では避けるふしやウロに魅力を感じ、作為を入れない方がいいと思った」と、シンプルな造形美と木目の面白さを表現することに決めた。COMMON MFG.の家具とはまったく異なる、新たな世界への挑戦となった。

その後、工房にはチェーンソーや鉋で成形したさまざまな形の木のブロックが並んだ。木の種類、また切る面によっても木目の出方が変わるため、試作を作れば作るほど迷いが生じたという。

次に、木目の面白さを生かすために特殊な機械で乾燥させ、ブラシで磨きをかけた。水分が抜ける際に割れたり、木のあくが表面に出てきて

変色したり、内側に秘めている力がぐっと表面に出ることがある。人間の意図を超えた造形の面白さに手応えを感じた。仕上げには木の色を生かすワックスなど数種を試みた。木と向き合う中で、ふつと湧いてくるアイデアを形にしなから、納得のいく「木の表情」を追求した。

いくことが正解ではないことを、他の匠たちに知ってほしい」と、岡部さんの新たな挑戦をたたえた。

今回の作品「木塊オブジェクト kinagori」は、31日まで、レクサス高知で一般公開展示を行い、購入もできる。



「自然のままの存在感を大事に」とアドバイスを受ける



エリア・コンサルティング



岡部 創太  
高知／木工家具職人

高知県高知市生まれ。インテリアに興味を持ち、高校卒業後、県外の専門学校や工房で研鑽を重ね、2008年高知にUターンし、工房「COMMON MFG.」を設立。デザインから設計、製作までを一貫して行うスタイルで、広葉樹の無垢材を主体とした家具製作を行っている。素材が持つ特性に対して、素直に作る。丈夫で使いやすく、簡素で心地よい形であること。時間や様式にとられない普遍的な物作りを目指している。

